

あとがき

本書は『追悼篇』と『拾遺篇』の二巻からなる。『追悼篇』には、岩崎先生の弟子やゆかりの研究者の論文、追悼文、「読書会の歴史」、年譜が収録されている。一目瞭然のことだが、論文の執筆者にはそうそうたる顔ぶれがそろっている。論文をご寄稿くださった方々には心よりのお礼を申し上げたい。また、各方面から寄せられた追悼文からは、岩崎先生が老若男女の仕事仲間や弟子たちからどれほど敬愛されていたかがまざまざと伝わってくる。この部分を読んで、そこここで胸が熱くなってしまう思いがするのは私だけではあるまい。

編集委員の三ッ石祐子さんがとりまとめた「読書会の歴史」は貴重な資料である。学期中の毎週土曜日に三田キャンパスの独文学専攻共同研究室で開催された読書会の記録は、岩崎先生が慶應義塾大学の教授職を退任した後も、いかに同大で数多くの後進を育ててくださったかを示している。かくいう私自身も三ッ石さんと同様に、読書会の初期のメンバーである。あの頃の岩崎先生ご自身にはしかし、後進を育てているなどという意識はあまりなかったのではないかと思う。むしろ、まだまだ未熟な院生や若手研究者とともに、ドイツ語の文章を読み解くことに純粋に喜びを感じているという風情であった。自分は他人からの指摘によって目を開かれる思いがした経験がいくたびもあるから、この読書会では、若い皆さんにもそのような瞬間を味わっていただきたい、と何度も述べておられた。岩崎先生は偉大な学者であると同時に、他者から学ぶことを喜びとする謙虚な学者でもあった。だからどれだけ老齢となっても、院生や若手研究者との読書会を通して、まだまだ学び、学問上の発見をする気であられた。そのようなドイツ語への飽くなき興味に突き動かされた岩崎先生を、私たちは尊敬せずにはおられず、その背中を見て育ったのである。

年譜を作成したのは、やはり読書会のメンバーの一人である加藤淳君である。古い資料の読み込みやインタビュー取材をもとに執筆されたもので、興味深いエピソードが数多く盛り込まれており、力作であると思う。もっとも、あらゆる年譜は事実の取捨選択のもとになりつつある。その取捨選択は原理上、完全に客観的であることはできない。私としては、岩崎先生の長年にわたる学問上の盟友であり、電話というメディアによって固い友情で結ばれていた平尾浩三先生や、とりわけ退任後に公私にわたって支え続け、岩崎先生から比類のない信頼を受けていた斎藤太郎先生への言及がない点だけは少し残念に思う。

『拾遺篇』は、岩崎先生の論文、随筆、先生が参加された座談会の記録を収録している。編集作業の当初の段階では「遺稿集」と呼んでいたが、ここに集

められたのはいずれも既出の文章であり、真の意味での遺稿ではないため、糸川麻里生さんの発案により「拾遺篇」と名付けることにした。この『拾遺篇』もまた、『ドイツ語不変化詞辞典』、『独和大辞典』、『ドイツ語副詞辞典』、『ドイツ語の副詞・心態詞研究 読解力の向上を求めて』などとともに、卓越したドイツ語学者としての岩崎英二郎先生のかげがえのない遺産となるに違いない。『拾遺篇』の端々から、岩崎先生が研究者としてどれほど唯一無二の存在であったかが感じ取られるけれども、ここでは二点だけ指摘しておきたい。

第一に、『拾遺篇』には IVG 東京大会（1990 年）での基調講演が収録されている。このテキストこそ繰り返し読むべきである。欧州の外で初めて開催された記念すべき IVG 大会の運営を会長として指導した岩崎先生のこの講演は、その格調高い言語表現において卓越するとともに、30 年以上たった今なおまったく色褪せることのない先駆的な内容をもつ。ゲルマニスティクにおける「他者」の意義を問うこの講演は、ドイツ再統一後の 1990 年代以降、学際化により「外の思考」にさらされることによって発展したドイツ語ドイツ文学研究の有り様を見事なまでに先取りするものである。慶應独文学専攻の共同研究室のドアには IVG 東京大会のプレートが貼られているけれども、その意味の重さを理解するには、何をおいてもこの講演を読まなくてはなるまい。

第二に、『拾遺篇』を読んで痛切に感じられるのは、これほどまでにドイツ文学に理解と関心のあるドイツ語学者は、日本において岩崎英二郎先生の後にも先にもあるまいという思いである。岩崎先生はドイツ語学者として文例収集のためにドイツ文学を幅広く読んでいたわけだが、同時に文学テキストを読むことへの喜びをつねに抱いておられた。だからこそ三田での読書会の歴史があったのであろう。読書会でとりあげられたテキストはほぼすべてが文学作品である。参加者は、ドイツ語学的な視点や概念を習得しつつ、古典的なドイツ文学のテキストを読むことができた。日本独文学会において、ドイツ語学とドイツ文学の研究が乖離している状況をかんがみると、岩崎先生の読書会ではほとんどユートピア的に両者が融合していたのである。

最後になるが、本書は編集作業において、慶應義塾大学の大学院生の協力を多くを負っていることを感謝の気持ちとともに記しておきたい。校正作業の過程において、将来を担う研究者の卵といえる大学院生たちに、岩崎先生やその同僚・弟子筋の研究者の仕事に触れてもらうことができたことには、少なからぬ意義があったと考えている。